

## 母親の情緒傾向が子どもの情緒発達に及ぼす影響

○ 堤 麗 岩田 泉  
(こどもの城 保育研究開発部)

### I. 目的

子ども達の中に表情が乏しい子どもや、感情表出が乏しく、他の子とうまくコミュニケーションがとれない、場に適応出来にくいのではないと思われる子どもがみられる。逆に表情が豊かで、他児との関わりが多い子どももみられる。なぜ、そのような違いが生じるのかという疑問を抱きながら母親を見てみると、感情表出や感情行動が乏しいといった、ある種の傾向が認められる。こうした子どもの感情表出傾向と、母親の情緒の傾向の間には、何らかの関係が存在するのではないかと推測される。荘厳ら(1989)は「出生直後から始まる母親の子どもに対する積極的な働きかけが、子どもの持つ潜在的な社会的行動傾向を引き出していく」としているが、このことから母親の感情傾向が、何らかの子どもの感情行動の発達の手がかりになっているのではないかと考えられる。この研究では、子どもの情緒発達を促すために親子遊びや母親指導において、どのような情緒面での働きかけが望ましいかを検討するための基礎研究として、「母親の情緒傾向」と子どもの感情行動を通して見られる「子どもの情緒発達」の関係について考察する。

### II. 方法

〔対象〕 こどもの城 保育研究開発部で行う母子教室に参加した、都内および近郊の幼児13名(1:5 ~2:5)と母親13名、計26名。

〔期間〕 質問紙、行動観察ともに1990年8月~1991年1月に実施した。

〔手続〕①母親の情緒の傾向については、母親の情緒特性調査票を作成して実施した。また子どもの情緒発達については、感情的発達調査票、集団の中での子どもの様子についての質問紙を作成し、母親に実施してそれぞれの結果を求めた。

②母親と子どもの情緒的關係を観察するために、母親が子どもに「絵本の読み聞かせ」をする場面を設定し、母親と子どものそれぞれについて感情表出の行動観察を行い、印象評定およびチェックリスト法によって分析し結果を求めた。

③次に、子どもの集団場面における感情行動について行動観察を行い印象評定およびチェックリスト法によって分析した。数量的な評定値を求め、それぞれの結果について相関を求めた。

〔質問紙・行動観察の概要〕

\* 子どもの感情的発達調査票は、明朗さ、不機嫌さ、嫌悪、怒り、恐怖、敏感さ、羞恥心、嫉妬、くやしがる、さみしがる、悲しがる、よく泣く、共感性などの項目から作成した。

\* 母親の情緒特性調査票は、対人情緒認知、対人欲求認知、対

人関係の認知、感情的被影響、感情的な温かさ、感受性、愛他性(親和性)、情緒性、などの要因からそれぞれ3項目からなる質問紙を作成した。

\* 「絵本読み聞かせ」場面の母親の印象評定項目は、緊張度、気分、親和性、表情のバリエーション、表現、発話量、感情表現語、場面に応じた声の表現、接近性、接触性、感情表現、子どもの反応に対応できる、会話・関係をコントロールできる、などから作成した。また、チェックリストの項目は、言葉で子どもに気持ちを伝える、情緒行動を促す、気持ちを質する、話しかけに答える、笑う、微笑む、顔をしかめる、怒る、表情をみる、接近する、接触する、動作で応える、絵本を指さしする、など。

\* 集団参加場面の子どもの印象評定項目は、緊張度、機嫌、好奇心・興味、表情のバリエーション、表情、発話量、感情表現語、接近性、感情表現、運動性、子どもへの関心、子どもへの共感性、子どもへの自己主張、子どもへの情緒反応、子どもへの親和性、おとなへの関心、おとなへの協調性、おとなへの自己主張、おとなへの情緒反応から作成した。

### III. 結果

(1) 感情的発達調査票における子どもの要因と有意水準5%以上で相関のある母親の要因は、a.子どもの「不機嫌さ」には、母親の情緒特性の「感情的被影響」、b.子どもの「嫌悪」には、母親の行動観察の「顔をしかめる」、c.子どもの「恐怖」には、母親の行動観察の「言葉で子どもの気持ちを質問する」、d.子どもの「敏感さ」には、母親の行動観察の「子どもの表情をみる」「絵本を指さしする」、e.子どもの「羞恥心」には、母親の情緒特性の「子どもへの感受性」「子どもへの共感性」「子どもへの情緒的対応」、f.子どもの「さみしがる」には、母親の情緒特性の「情緒性」、g.子どもの「悲しがる」には、母親の情緒特性の「感情的被影響」母親の行動観察の「子どもの情緒行動を促す」、h.子どもの「よく泣く」には、母親の情緒特性の「感情的被影響」、そして、i.感情的発達調査票の総得点には、母親の情緒特性の「感情的被影響」「情緒性」である。

(2) 集団参加場面における子どもの感情行動と有意水準5%以上で相関のあった母親の要因は、a.子どもの「緊張度」には、母親の行動観察の「親和性」「反応に対応できる」「会話、関係をコントロールできる」、b.子どもの「機嫌」には、母親の行動観察の「親和性」「反応に対応できる」「会話、関係をコントロールできる」、c.子どもの「好奇心・興味」には、母親の行動観察の「反応に対応できる」d.子どもの「表情のバリエーション」には、母親の行動観察の「親和性」「反応に対応できる」「会話、関係をコントロールできる」「言葉で情緒行動を促す」、e.子どもの「表情」には、母親の行動観察の「機嫌」

「親和性」「表情のバリエーション」「感情表現語」「感情表現の行動」「反応に対応できる」「会話、関係をコントロールできる」「言葉で情緒行動を促す」、f.子どもの「発話量」には、母親の行動観察の「親和性」「感情表現語」「場面に応じた声の表現」、g.子どもの「感情表現語」には、母親の行動観察の「親和性」「表情のバリエーション」「感情表現語」「反応に対応できる」「会話、関係をコントロールできる」、h.子どもの「接近性」には、母親の行動観察の「反応に対応できる」「会話、関係をコントロールできる」、i.子どもの「感情表現の行動」には、母親の行動観察の「緊張度」「親和性」「表情のバリエーション」「発話量」「感情表現語」「反応に対応できる」「会話、関係をコントロールできる」「言葉で情緒行動を促す」「表情を見る」、g.子どもの「子どもへの関心」には、母親の行動観察の「反応に対応できる」「会話、関係をコントロールできる」k.子どもの「子どもへの協調性」には、母親の行動観察「親和性」「反応に対応できる」「会話、関係をコントロールできる」l.子どもの「子どもへの自己主張」には、母親の行動観察「反応に対応できる」「会話、関係をコントロールできる」、m.子どもの「子どもへの情緒反応」には、母親の行動観察「親和性」「反応に対応できる」「会話、関係をコントロールできる」、n.子どもの「子どもへの親和性」には、母親の行動観察「親和性」「反応に対応できる」と「会話、関係をコントロールできる」、o.子どもの「おとなへの関心」には、母親の行動観察「反応に対応できる」「会話、関係をコントロールできる」、p.子どもの「おとなへの協調性」には、母親の行動観察「親和性」「反応に対応できる」「会話、関係をコントロールできる」q.子どもの「おとなへの情緒反応」には、母親の行動観察「親和性」「感情表現語」「反応に対応できる」「会話、関係をコントロールできる」、そして、r.子どもの「おとなへの親和性」には、母親の行動観察「反応に対応できる」と「会話、関係をコントロールできる」などである。

#### IV. 考察

##### (1) 子どもの感情発達と母親の要因との関連について

母親の要因で最も子どもの情緒に有意な相関があった項目は母親の情緒特性の「感情的被影響」であり、子どもの「不機嫌さ」「悲しがる」「よく泣く」「感情的発達調査票の総得点」とそれぞれ有意な相関がみられた。「感情的被影響」の内容は「まわりの人の感情に影響されやすい」「いつも冷静でいられない」「人が悩んでいると自分もまきこまれてしまう」というもので、母親自身が周囲の環境・刺激に対して情緒的な影響を受けやすいかどうか、人の気持ちに対して敏感であり、繊細な感情を持っているかどうかという項目である。このことから、母親が情緒的に敏感であるという傾向を、子どもが手がかりとして、不機嫌さや悲しがる、よく泣くといった感情行動（情緒性）をよく表出すると考えられる。また、情緒特性調査票の「情緒性」も、子どもの「さみしがる」や「感情的発達調査票の総得点」と有意な相関が得られている。「情緒性」の内容は「感情の起伏が激しいほうだ」「情に動かされるほうだ」「涙もろいほうである」というもので、これらも子どもの情緒傾向

に何らかの影響を与えていると考えられる。さらに、子どもの「嫌悪」の感情は、母親の行動観察の「顔をしかめる」と有意な相関がみられ、これは母子ともに類似した情緒傾向であり、母親の情緒表出が体験として子どもの情緒的側面に影響を与えていると考えられる。

##### (2) 集団参加場面における子どもの情緒行動と母親の要因の関連について

母親の要因で印象評定項目の「親和性」「反応に対応できる」「会話、関係をコントロールできる」のそれぞれは、集団参加場面で観察される多くの情緒行動項目と相関が見られ、例えば集団参加場面での子どもの「緊張度」との相関から、母親が親和的で、子どもの反応に対応でき、会話や関係がうまくとれていれば子どもの緊張も緩和していだろうと推測される。このことから、これらの項目は、子どもが情緒の発達を促すうえで、重要な要因となると考えられる。また、集団参加場面での「緊張度」「表情のバリエーション」「表情」「感情表現」「子どもへの情緒反応」「おとなへの情緒反応」などが、母親と一緒に場面に観察される情緒行動・表出、すなわち、母親の「気分」「感情表現語」「感情表現」「情緒行動を促す」「場面に応じた声の表現」の各項目と相関がみられ、子どもの対人情緒行動は母親の情緒表出の影響を受けていると考えられる。

集団参加場面での対人行動では、子どもに対する情緒反応よりも、おとなへの情緒反応の方が高い相関を示すことから、まず、おとな（特に母親）との情緒的關係がモデルとなり、その後子どもへの情緒反応の発達へとつながるのではないかと考えられる。

以上のことから、母親の情緒傾向は子どもの情緒行動の発達の重要な手がかりになっていると思われ、特に、母親の子どもに与える様々な影響のうち、笑う、微笑むなどの肯定的な情緒表出よりも、顔をしかめる、怒るといった否定的な情緒表出の方が、子どもの情緒発達により影響を与えていると印象をうけた。その意味では、親子遊びや日常の母子関係の指導のなかで、母親の否定的な情緒の表出については、意識的に配慮する必要があると思われる。

なお、今回の研究では、対象人数が26名と少ないため、今後は対象の数を増やし、更に検討を加えていきたい。

この研究にご助言をいただいた川村学園女子大学、松井洋先生に感謝の意を表します。また、分析に協力していただいた青山学院大学学生、中嶋崇博君に感謝致します。